

ひらけ、未来



第9回言の葉大賞で大賞を受賞した半田華乃音さんは、福岡県久留米市の公立高校生。マザー・テレサの伝記を読み、その言葉と行動に触れたことが将来の夢の原点となり、「国際公務員として世界を舞台に働いている自分」を思い描いていると作品に書いていました。夏休み返上で受験勉強に励む半田さんを学校に訪ね、国語科の野本智先生にも同席していただき、夢に向かってアクションを起こしている様子を伺いました。

福岡県立久留米高等学校

福岡県南部・筑後地方最大の都市、久留米市は、地下足袋生産に端を発するゴム化学工業の街で、タイヤメーカーのプリチス

トン創業の地としても知られています。

福岡県立久留米高等学校は、JR九州の久大本線「久留米高校前駅」から徒歩三分。JRの駅名に公立校の名前が付いているのは全国でもかなり珍しいこと

ようです。私たちが久留米高校を訪れて

半田華乃音さんに会ったのは、梅雨明け間もない夏の日でした。ちょうど「英語弁論・暗唱大会」の開催日で、玄関先は保護者の方々や出場する生徒たちで賑わっ

第9回言の葉大賞 大賞

未来の自分

福岡県立久留米高等学校 半田華乃音

「未来の自分」を思い描いたとき一番輝いているのは、「国際公務員として世界を舞台に働いている自分」である。

私の夢の原点はマザー・テレサの一生を書いた一冊の本である。そこには「あなたがちょっとほほえむだけでいいのです。新聞を読んであげると喜ぶ目の不自由な人も、買い物をしてあげると喜ぶ、重い病気の母親もいるでしょう。小さいことでもいいのです。そこから、愛は始まるのです」というマザーの言葉があった。私はこれを読んだときこんなに素敵な言葉を残し、数えきれない人の心の支えになったマザーのような人になると強く心をきめた。そんな中で見つけた国際公務員という仕事。どの国の政府からも拘束されず、中立の立場、かつグローバルな視点で教育の

普及、難民救助などを行うという仕事。この仕事が一番なりたい自分に近づけると私は思った。この仕事に就くにあたり私が一番必要だと思う力は、物事を客観的に公平に捉えることだと思う。私は日本を「思いやりが深く親切な人ばかりで、国内で助け合うのはもちろん、他国にも手を貸す誇れる国」だと思っている。しかし、最近読んだ本に日本を移民も難民も受け入れず、独自の文化を維持している国と捉える人も少なからず存在すると書いてあった。私は日本をこんな風に考えたことがなかったし、それが悔しかった。同時に物事を第三者の立場に立ち、幅広い視野で考えることの重要性を改めて感じた。そしてそういう力をもっと培っていかうと思った。

だから私は、今のうちに色々な人、国の文化や考え方をたくさん学び吸収し、公平な立場で問題を見、解決できるようにしたい。そして世界中の多くの人をどんな形からでもバックアップし、少しでも早く、多くの現代の世界問題を解決し今よりも更なる世界平和を目指したい。だから私は、国際公務員になりたい。これが私の考える一番輝く未来予想図である。

未来に向かって勉強中

野本先生に呼ばれて現れた半田華乃音さんは、授賞式のとくと同様、少し緊張している様子ながらも、陸上部でキャプテンを務めただけあって、高校生らしい、活発でしっかりとした印象でした。

作文の中で「国際公務員」への夢を書いてくれていましたが、その夢に近づくために、現在は長崎大学の多文化社会学部を目指して勉強中だと教えてくれました。

「言の葉大賞の授賞式に行ったら、思ったより広くて立派な会場で、すごい賞を取っちゃったんだなと思いました。これは作文に書いたように夢を叶えなきゃな、と自分の目標がもっと明確になりました」と半田さん。実際のいろいろな大学のオープンキャンパスに行つて、総合的な学びを一年間した後、専門コースに分化する長崎大学に照準を定めたそうです。

授賞式当日の二〇一九年三月二十三日付日本経済新聞に、大賞・最優秀特別賞受賞者の作品が掲載されたのですが、新聞紙上で半田さんの作品を目にした元国際公務員の女性が、「国際公務員になるには長い準備期間が必要ですので、頑



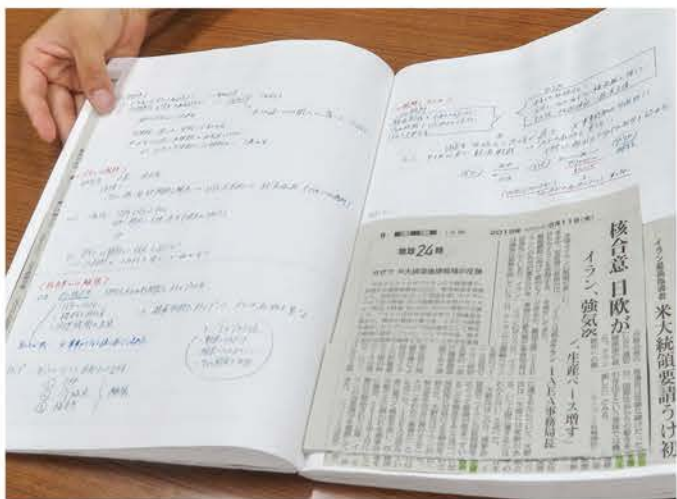
国語科の野本智先生。二年生の作文を応募して下さった。

から取り組んでいる総合的な学習の時間が実を結び、高い進学率の維持に貢献しているようです。

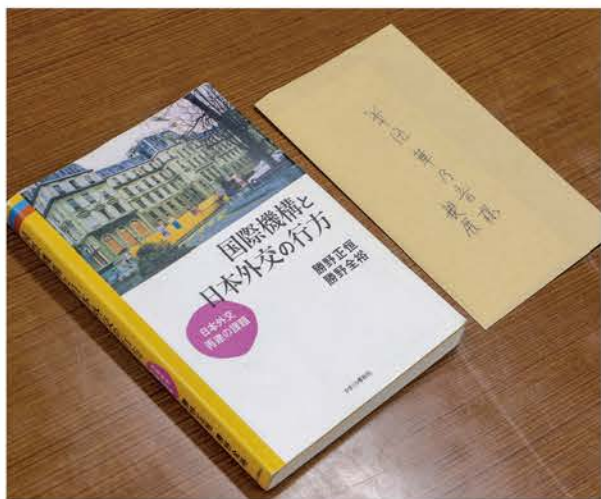
総合的な学習の時間・NEWセサミプラン

国語科の野本智先生に学校の話を聞いたのですが、先生の名刺に「生きる力を育むNEWセサミプラン」と書いてありました。どういう取り組みなのかを尋ねたところ、総合的な学習の時間を実施している久留米高校独自の課題研究活動だということでした。一学年では現代社会の課題に関するテーマを設けて課題研究とディベートを、二学年ではグループでテーマを決め、実地調査など課題の探究・研究をして発表会を、三学年では進路別に小論文講座や大学の教員による講座などをやるそうです。特に一学年と二学年はクラスで代表を決めて、クラス対抗の大会を行っています。大会の運営も生徒たち自身が進め、大会後の振り返りも、アンケートや総括集の発行できっちり行われています。

「セサミ」という言葉は、『アラビアンナイト』の『アリババと四十人の盗賊』で、



新聞の自習ノート。国際情勢についてびっしり書き込みが！



元国際公務員の方から送られてきた手紙と本

盗賊が財宝の隠し場所になっている洞窟の扉を開ける呪文「オープンセサミ」ひらけ、ゴマ」から取っているとか。生徒たちが未知の扉を開き、未来を切り拓いていく力を養っていく意で、「セサミプラン」と名付けられたそうです。この活動により、生徒たちが自主的に行動し、主体的な学びをするきっかけとなっているということでした。



言の葉大賞授賞式会場にて(半田さんは左から2人目)久留米高校の入賞者のうち女子3名は同じクラスだった。

張ってほしい」と、その日のうちに激励の手紙を書いて、学校を通して半田さんに本を送って下さったそうです。その方の友人親子(やはり国際公務員の方々)が著した本を早速読んでみたところ「正直ちんぷんかんぷんで、知識が足りないなと思いました」と半田さんは打ち明けて、苦笑していました。

そこで「時事問題が分かるようになるう」と思って、新聞を読むようになりました。国際情勢を中心に、新聞記事を切り抜いてノートを作り、分からないことを自分なりに調べて書き込むようにしました」と、自作の切り抜きノートを見せてくれました。

そのノートは朝日新聞の国際面を中心に気になる記事を貼り付け、必要な箇所にはマーカーを引いたり、記事に関連する国々や前後関係について調べたことを簡潔にまとめたり、疑問とその答えを書いたり、とても分かりやすく整理されたものでした。「テレビで池上彰さんが解説しているのを見てメモったりもしています」。

例えば「香港でデモ」というページには、三十年前の「天安門事件」についてや、

見えな未来は見える過去から



祇園祭も佳境に入った二〇一九年の夏休み、第9回言の葉大賞®の大賞受賞者、京都市立高倉小学校の吉田奈桜さんを訪ねました。審査員会では、当時五年生だった吉田さんの着眼点に評価が集まりました。「未来の自分を描いたとき」というテーマに対し、過去を見つめようという考えに至ったのはなぜか。吉田さんの人柄や、普段の学校生活の様子など、作品の背景を求めて、サマースクールを終えた吉田さんに話を伺いました。



田さん。ご家族の反応を尋ねたところ「高校生になって変わったね、とよく言われます」。自主的な学びはもちろん、陸上部のキャプテンなど、積極的に責任感ある活動は身近な人からも認められているのです。

未来の扉をひらく鍵は今の自分

保健の授業で見たビデオで、世界中に存在する難民の問題と難民をサポートする団体の存在を知り、同時に小学生のときに伝記を読んで心に残っていたマザー・テレサの姿を重ね、自分も世界中で困っている人たちをサポートする夢を育んだ半田さん。

実は半田さんのお兄さんも大きな夢を持って大学で機械航空工学を勉強中だそうです。お兄さんの夢は宇宙飛行士。半田兄妹の夢は地球規模、宇宙規模で膨らんでいます。

まず今できることから始め、知識を増やし、未来への扉を一つずつ開いている半田さん。焦らず着実に「未来の自分」に近づいていってほしいと応援しています。

考えたこと無かったなあと思いました。世界にはそういう問題もあるんだと思いました。働かないといけない子どもたちや、紛争地帯から国境を越えて病院設備の整った国に行つて出産をする人たちの記事を読んで、そういう人たちがいるのなら、その人たちを助けたいなと思いました。

切り抜きで勉強するといった自主的な学びの姿勢は、久留米高校の「NEWセサミプラン」で鍛えられたものでしょう。「受験勉強の合間にこうやって知識をためておこうと思って、やっています」と半

中国当局の民主化運動に対する姿勢の変遷など、自分で調べたことが半田さんの字で丁寧に書き込んでありました。ネットで調べたことをコピー&ペーストするのではなく、自分の字で書くことで頭に入るのです。

新聞を読み始めたことで、ニュースが理解できるようになり、楽しくなってきたそうです。「テロリストの子どもたちを育てる学校ができた」という記事を読んだ、こういう目線があるんだと気がきました。テロの連鎖を無くすためにテロリストの子どもたちに教育を与えるなんて